

豊島与志雄作

手品師

朗読 小宮和子

第5卷 2. 豊島与志雄 「手品師」

豊島与志雄（とよしま よしお）

1890年（明治23） - 1955年（昭和30）。福岡県生まれ。

東大在学中に、芥川龍之介、山本有三、久米正雄らと第三次「新思潮」を創刊し、「湖水と彼等」を発表。新進作家としてデビュー。「生あらば」「野ざらし」「白い朝」などの神秘的な作品を書き続けた。児童文学においても「天狗笑」「悪魔の宝」「銀の笛と金の毛皮」など幻想に満ちた作品が多く、この「手品師」もそのジャンルに含まれるもので、1923年（大正12）5月に「赤い鳥」に発表された。

内容は「ペルシャにハムーチャという手品師がいた。ある時、すべてのものを煙にしてしまうという究極の術のあることを知り7年間の修行の末その術を極めた。だが、その術を使った彼には思わぬ結末が待っていた」というもの。また、豊島はユーゴの「レ・ミゼラブル」や、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」などの名訳でも知られている。

「用語解説」

栈敷（さじき）

祭りなどを見物するために高く構えた床

昔ペルシヤの国に、ハムーチャという手品師てじなしがいました。妻も子もない一人者で、村や町をめぐり歩いて、広場に毛布を敷き、その上でいろんな手品を使い、いくらかのお金をもらって、その日その日を暮らしていました。赤と白とのだんだらの服をつけ三角の帽子をかぶって、十二本のナイフを両手で使い分けたり、逆立ちして両足で金の毬まりを手玉てだまに取ったり、鼻の上に長い棒を立ててその上で皿廻さらまわしをしたり、飛び上がりながらくるととんぼ返りをしたり、その他いろいろなおもしろい芸をしましたので、あたりに立ち並んでる見物人から、たくさんのお金が毛布の上に投げられました。けれどもハムーチャは、そのお金で酒ばかり飲んでいましたので、いつもひどく貧乏でした。「ああああ、いつになったら、お金がたまることだろう」と嘆息たんそくしながらも、ありったけのお金を酒の代

にしてしまいました。雨が降って手品が出来ないと、水ばかり飲んでいました。そしてだんだん世の中がつまらなくなりました。

ある日の夕方、ハムーチャは長い街道を歩き疲れて、ぼんやり道ばたに屈み込みました。すると、遠くから来たらしい一人の旅人が通りかかりました。旅人はハムーチャのようすをじろじろ見ていましたが、ふいに立ち止まってたずねました。

「お前さんは奇妙な服装なりをしているが、一体何いったいをする人かね」

「私ですか」とハムーチャは答えました。「私は手品師てじなしですよ」

「ほほう、どんな手品を使うか一つ見せてもらいたいものだね」

そこでハムーチャは、いくらかの金をもらって、早速得意な手品を使ってみせました。

「なるほど」と旅人は言いました、「お前さんはなかなか器用だ。だが私は、お前さんよりもっと不思議な手品を使う人の話を聞いたことがある。世界にただ一人きりという世にも

不思議な手品師だ」

「へえー、どんな手品師ですか」

そこで旅人は、その人のことを話してきかせました。——それは手品師というよりもむしろ立派な坊さんで、善ぜんの火の神オルムーズドに仕えてるマジジでした。長い間の修しゆぎ行ぎやうをして、ついに火の神オルムーズドから、どんな物でも煙にしてしまう術さずを授かりました。何でも北の方の山奥に住んでいて、そこへ行くには、闇の森や火の砂漠や、いろんな怪物が住んでる洞ほら穴あななど、恐ろしいところを通らなければならぬそうです。そのマジジの不思議な術を見ようと思って、幾いく人にんもの人が出かけましたが、一人として向こうに行きついた者はないそうです。

「本当ですか」とハムーチャはたずねました。

「本当だとも、私は確かな人から聞いたのだ」と旅人は言いました。

「だがお前さんには、とてもそのマージの所まで行けやしない。それよりか、自分の手品てじなの術をせいぜいみがきなさるがよい」

そして旅人は行ってしまいました。

ハムーチャは後に一人残って、じっと考え込みました。——こんな手品なんか使っていない。一生つまらなく終わるだけのものだ。それよりはいつそ、その不思議なマージをたずねていってみよう。途中で死んだってかまうものか。もし運よく向こうへ行けて、どんな物でも煙にしようという術を授さずかったら、それこそ素敵すてきだ。世間せけんの者はどんなにびつくりすることだろう。

ハムーチャは命がけの決心をしました。マージをたずねて北へ北へとやって行きました。途中でも村や町で手品を使って、もらったお金を旅費にして、酒もあまり飲まないことになりました。

北の方へ進むにしたがって、マージの^{うわき}噂^{しだい}は次第に高くなってきました。けれど、マージがどこに住んでいるかは、誰も知ってる者がいませんでした。でもハムーチャは一生懸命でした。幾月もかかって、まっすぐに北の方を指して旅を続けました。野を越え山を越えて進みました。しまいには、人里遠く離れた^{しんざん}深山に迷い込んでしまいました。それでもハムーチャは後に引返しませんでした。木や草の実を食ったり、谷川の水を飲んだりして、進んで行きました。獅子の森や、^{どくじゃ}毒蛇の谷や、^{わし}鷲の山や、いろんな恐ろしい所を通りぬけました。次には闇の森がひかえていました。鼻をつままれてもわからないほどまっ暗な森でした。次には怪物の^{ほらあな}洞穴がありました。見ただけでもぞっとするような恐

ろしい怪物が、幾つもの洞穴の中に唸うなっていました。次には火の砂漠がありました。広々とした砂漠に一面に火が燃え立っていました。ハムーチャは眼をつぶって、一生懸命に駆けぬけました。火の砂漠を駆けぬけた時には、もう眼がくらみ息がつまって、地面に倒れたまま、気を失ってしまいました。

しばらくたつと、「ハムーチャ、ハムーチャ」と呼ぶような声がしましたので、彼ははつと眼を開きました。見れば、白木造りのささやかな家の中に自分は寝ているのでした。枕もとには一人の気高けだかい人が座っていました。まっ白な服装ふくそうをし、頭に白布を巻いた、年齢のほどはわからない人でした。ハムーチャが眼を開いたのを見て、静かに微笑ほほえんで言いました。

「ハムーチャ、わたしはお前が来ることを知って迎えてあげたのだ。今までに幾いくにん人とな
く、わしをたずねて来かかった者はあるが、みな途中で引き返してしまった。それなのに

お前は、たとえ命がけとはいえ、よくもこれまでやって来た」

ハムーチャは起き上がって、頭を床にすりつけながら言いました。

「ああマージ様、どんな物をも煙にしようというマージ様は、あなたでございませう。どうか私にその術をお授けさず下さいませ」

「授けてもよいが、それには七年間苦しい修行しゅぎようをしなければならぬぞ」

「はい、七年でも十年でも一生の間でも、どんな苦しい修行もいたします」

そしてハムーチャは、七年間マージの許もとで修行することになりました。それがまた一

通りの修行ではありませんでした。水一杯飲まないで一週間も座り続けていたり、谷川の

水に終しゅうじつ日首までつかっていたり、重い荷を背負って山道を上がり下りしたり、むずか

しい書物を何千回も写し直したり、一月の間も無言でいたり、いろんな辛いことがありま

した。そして始しじゅう終、祭壇に燃える火を絶やしてはいけませんでした。ハムーチャは何度

か力を落としましたが、その度毎たびごとに思いあきらめて、ともかく七年間の修しゆぎよう行を終えました。そして、どんな物でも煙にするという火の神の術を授さずかりました。その上、が
んらいが手品師ですから、その煙をいろんなものの形にするという工夫くふうをしました。

ハムーチャがいよいよ世の中へ戻ってゆくという時、マージは彼へよく言い聞かせました。

「物を煙にするこの術は、善ぜんの火の神オルムーズドから授さずかったのだから、すべて生きてるものや役に立つものを決して煙にしようとしてはいけない。オルムーズドから世の中に遣あわされたのだと心得ていなければならない。もしよからぬ心を起こすと、お前の術は悪あくの火の神アーリマンのものとなって、自分を亡ほろぼすようなことになる」

「承知いたしました」とハムーチャは答えました。

そこでハムーチャは、再び火の砂漠や闇の森や怪物の洞穴ほらあななどを通り越して、人間の住んでいる方へ出て来ました。そしてようすをうかがってみると、もう七年もたった後のことでしたし、誰もマージの許もとへ行きついた者もありませんでしたから、マージの噂うわさは嘘だとして消えてしまっていました。

「今に皆をびっくりさしてやる」とハムーチャは一人微笑ほほえみました。

ある町まで行くと、ちようどお祭りの日でした。ハムーチャは人だかりのしてる広場に、新しい毛布を広げて、まず普通の手品てじなを使ってみせました。それから大声で言いました。

「さてこれから、世にも不思議な術を見せてあげますぞ。これは火の神オルムーズドから授さずかった術で、どんなものをも煙にしまつて、その煙でいろいろな物の形を現わ

すという、天下にまたとないみょうじゅつ妙術ですぞ。さあさあ、不用な物があつたら持つておいで、この場で煙にしてご覧らんに入れる」

そこで見物人の一人が古い帽子を差し出しました。ハムーチャは受け取つて、もう破れこけて役に立たないことを見定めると、それを毛布の上に置き、自分はその側に屈んで、胸に両手を組み合わせ口に何か唱えました。と、不思議にも、その古帽子がふーツと煙になつて、その煙がまた大きな鳥の形になつて、空高く飛び去つてしまいました。

あまりの不思議さに、人々はあつけにとられました。次には夢中むちゆうになつて喝采かつさいしました。そしてお金が雨のように投げられました。ハムーチャは得意になつて、なおいろいろな物を煙にしてみせました。

それからは、ハムーチャの噂うわさがぱつと四方しほうに広がりました。ハムーチャの行く先々で、もうその地方の人々が待ち構かまえていました。中には、是非私共ぜひの町へ来てくれと、

馬車を迎えによこす者さえありました。しかしハムーチャは、馬車なんかには乗らずに、例の赤と白とのだんだらの服をつけ、三角の帽子をかぶって、てくてく歩いて行きました。ふところ
懐にはたくさんのお金がたまっていました。いくら酒を飲んだりごちそうを食べたりしても、なかなか使いきれませんでした。

そしてハムーチャは町々をめぐって、ある大きな都にさしかかりました。都の人達は、今にハムーチャが来ると大騒ぎをしました。いよいよハムーチャがやって来ると、都の一番賑やかな広場に案内しました。広場にはもう立派な毛布が敷きつめられ、不用な品々が山のように積みまれ、四方には棧敷が出来ていて、ぎっしり人だかりがしていました。ハムーチャは少しびびりました。やがて、ようようと場所のまん中に進み出ました。

四方から、かみなり 雷 はくしゆ のような拍手が起こりました。

四

ハムーチャはまず、ナイフを使い分けたり、足で金の毬まりを手玉てだまに取ったりして、普通の手品てしなをやりました。それが済むと、いよいよ煙の術にかかりました。ところが、あまりいろいろな品物がつまれていますので、どれから先にしてよいかわからずに、しばらく考えてみました。そしてふと思いついて、皆一緒に煙にしてしまおうときめました。例の通りそこに屈んで、胸に両手を組み合わせ口に何やら唱えますと、まあどうでしょう、山のように積まれてる品物が、一度にどっと煙になって、その煙がまたさまざまな花となって、空一面に広がりました。あまりの見事さに、あたりの人々はやんやと囃し立てました。

やがて煙の花が消え、狂うような喝かつさい采が静まると、人々は少し不満足に思いました。いろいろな物を一つずつ煙にしてもらおうつもりだったのが、一度ですんでしまったからです。

「もつと何か煙にして下さい。この金入れでもいいから」

そう言つて一人の者が、大きな革の財布を差し出しました。

「いや、いけない」とハムーチャは答えました。「これは悪あくの火の神アーリマンの術ではなくて、善ぜんの火の神オルムーズドの煙だから、役に立たない不用な物しか煙にはなせないのだ」

すると、他の一人が言いました。

「ここに敷きつめてる毛布をみなあなたに上げよう。そうすれば、あなたのその小さな毛布は不用になるでしょうから、それを煙にして下さい」

「なるほど」とハムーチャはちよつと考えてから答えました、「この立派な毛布をもらえば、私の小さな毛布はもういらなくなるわけだ」

そこで彼は、自分の毛布を煙にしてみせました。煙は青々とした野原の形となつて、空

高く消えてゆきました。

すると今度は、ある人が立派な靴を持ち出しました。

「この立派な靴をあなたに上げよう。そうすれば、あなたのその破れた靴は不用になるでしょうから、それを煙にして下さい」

「なるほど」とハムーチャはちよつと考えてから答えました。「この立派な靴をもらえば、私の破れ靴はもういらなくなるわけだ」

そこで彼は、自分の靴を煙にしてみせました。煙は大きな馬のひずめ蹄の形となって、空高く消えてゆきました。

都の人々は、それでもまだ承知しませんでした。あまりの不思議さに、もうみんな夢中になっていました。

鳥の羽のついた立派な帽子を持ち出す者がありました。宝石のついた見事な服を持ち出

す者がありました。らくだの子の胸毛で織ったシャツを持ち出す者がありました。

そしてハムーチャは、前と同じように身につけてるものをみな煙にしてしまいました。

三角の帽子は禿鷹はげたかの形の煙となって消えました。赤と白とのだんだらの服は大蛇だいじゃの形

の煙となって消えました。汚れた麻あさのシャツはなめくじの形の煙となって消えました。

ハムーチャはまっ裸となって、立派な衣装の重ねかさである側に立っていました。

そこへ十五六歳の娘が一人、肩から胸まで現わにして飛び出しました。金色の髪がふさ

ふさと肩に垂れ、海のように青い眼をし、薔薇色ばらの頬ほほをして、肌は大理石のように滑なめら

かでまっ白でした。

娘は言いました。

「私はこの身体からだをあなたに上げましょう。そうすれば、あなたの年とったしわだらけの身体は不用になるでしょうから、それを煙にしてみせてください」

「なるほど」とハムーチャはしばらく考えてから答えました、「あなたの美しい身体をもらえば、私の汚ない身体はもういらなくなるわけだ」

そこで彼は、胸に両手を組み合わせ、口に何やら唱えました。すると彼のからだは、ふーっと煙になってしまい、その煙がまっ黒な雲となって、空高く消え失せました。

人々は我を忘れて喝采かつさいしました。ところが、ハムーチャはいつまでたっても戻って来ませんでした。戻って来るはずはありません。自分が煙となって消え失せてしまったのですもの。何もかもそれでおしまいになりました。